☆年間第１３主日（７月２日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（列王記下　４章８-11、14-16a 節）

　ある日、エリシャはシュネムに行った。そこに一人の裕福な婦人がいて、彼を引き止め、食事を勧めた。以来彼はそこを通るたびに、立ち寄って食事をするようになった。
彼女は夫に言った。
「いつもわたしたちのところにおいでになるあの方は、聖なる神の人であることが分かりました。あの方のために階上に壁で囲った小さな部屋を造り、寝台と机と椅子と燭台を備えましょう。おいでのときはそこに入っていただけます。」
　ある日、エリシャはそこに来て、その階上の部屋に入って横になり、従者ゲハジに、「あのシュネムの婦人を呼びなさい」と命じた。ゲハジが呼ぶと、彼女は彼の前に来て立った。エリシャは、「彼女のために何をすればよいのだろうか」と言うので、ゲハジは、「彼女には子供がなく、夫は年を取っています」と答えた。そこでエリシャは彼女を呼ぶように命じた。ゲハジが呼びに行ったので、彼女は来て入り口に立った。エリシャは、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱いている」と告げた。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 ６章３-4、8-11 節）

　それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。
　わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に

対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

福音朗読（マタイよる福音書　10 章 37-42 節）

そのとき、イエスは使徒たちに言われた。
「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」
「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。
はっきり言っておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

いよいよ夏本番の 7 月に入りました。まだ梅雨空が続いていますので、雨の災害が心配ですね。大きな災害にならないように祈りましょう。
今日のミサの祈りはどんなでしょうか。集会祈願と言って今日のミサの主題的な祈りがありますが、そこでは「罪に迷うことなく、いつも真理の光のうちに歩むことができますように」とあります。この祈りのために第一朗読や第二朗読、福音の朗読などが選ばれているのです。また、朗読をより深く味わえるように「答唱詩編」などが選ばれ歌われています。このようにミサは私たちの信仰生活を豊かにする要素が織り交ぜられている豊かな祈りなのです。それぞれの関係を確認しながらミサに与るのも意味あることですね。

第一朗読（列王記下　４章８-11、14-16a 節）

この列王記では預言者エリアの弟子であったエリシャの話がでてきます。このエリシャを預言者として認めもてなした一人の女性が、預言者の報いを得て子どもを授かる話です。聖書にはこのように神の恵みとして子どもを授かる話がよく出てきます。この話の中ではこの女性は子どもがいないことを嘆いているわけではないのですが、エリシャはその心のうちを見て、その内なる願いを聞き届けたのでしょう。神の慈しみとはそういうものなのでしょう。この話は福音の朗読でイエスの言葉で強化されていきます。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 ６章３-4、8-11 節）

パウロは洗礼を受けた意味について話してくれています。洗礼を受けると私たちは洗礼により罪が洗い流されたと考えますが、それはそうですが、それよりもキリストとともに葬られ、その死に与るものになったと考えるべきだと教えています。今の私たちの洗礼は水を額に垂らしていますが、パウロの時代、つまりイエスの時代には洗礼は水に沈められるものだったのです。水に沈められることは死を意味していて、そこからの復活が洗礼の意味だったのです。つまり洗礼はキリストと共に死ぬことであり、またキリストと共に生きること（キリストの復活に与ること）なのです。私たちは被造物ながら、造られた存在ながらイエスの命に似るものとなる、つまり永遠に神の喜びの中に生きる存在となったのです。

福音朗読（マタイよる福音書 10 節 37-42 節）

今日のマタイの福音は先の第一朗読の列王記の流れを持っています。イエスはご自分に従う人に対して随分と厳しい要求を掲げておられます。イエスの考え、望みははっきりしています。それは何事においても神を優先させるということです。それはまさに自分の考えに従わず、自分の欲を選ばないことです。イエスを選ぶということです。しかしこれだけではないのです。

イエスは続けて言われます。「私のために命を失うものはかえってそれを得るのである」と。このような考えは当時に人々にとって考えもしないことでした。現世的な損得勘定によって動かされていたからです。エリシャを心からもてなした女性はエリシャ預言者を神の人としてもてなしたのです。つまり自分の前に現れた隣人を神の人、神から遣わされた人としてもてなすことは神の恵みを受けるのです。現世的な損得勘定ではなく神の勘定に従う必要があるのです。

神さまのすばらしさを映している桔梗の花（2023 年 6）

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光